



第 77 回 (2013. 10 月号)

Skin「皮膚」 Roald Dahl

早川文庫『あなたに似た人』 所載 田口俊樹訳

by 柴田耕太郎

文法力をつけたいが、無味乾燥な文法書など読みたくない。

そんな読者のために、人気小説の翻訳書に見る誤訳・悪訳をとりあげ、文法面から解説してゆく。題材は最近映画化された『チョコレート工場』の原作者で、日本がロケ地になった映画『007 は二度死ぬ』の脚本家でもあるロアルド・ダール(Roald Dahl)の短編から任意に選ぶ。いずれも原文で 10 ページ程の短いものが中心だから、読者も自分で訳してみて、この解説を参考に市販訳との優劣を競ってみてはいかがだろうか。

冒頭に誤りの種別と誤訳度を示したうえ、原文と邦訳、誤訳箇所を掲げます。どう間違っているのか見当をつけてから、解説を読んでください。パズルを解く気分で、楽しみながら英文法を学びましょう。

誤訳度：*** 致命的誤訳(原文を台無しにする)
 :** 欠陥的誤訳(原文の理解を損なう)
 :* 愛嬌的誤訳(誤差で許される範囲)

(訳文 p179—原文 517) * 指示形容詞

あのドリオリという老人は、リボリ街の歩道を、さもいたいたしげに、トボトボと歩いていた。

The old man who was called Drioli shuffled painfully along the sidewalk of the rue de Rivoli.

[コメント]

この短編の出だしだが、「あの」が唐突。この老人は、後を読んでも「ああ、あれね」と思う人間ではない。

(修正訳)⇒**ドリオリという老人が**

(p179—517) * 掛かり方

店のウィンドウにある数々の品物を、興味のない眼で、とおり見ながら——香水、絹のネクタイ、シャツ、ダイヤ、焼物、骨董品、豪華な本など。

He moved on glancing without any interest at the things in the shop windows — perfume, silk ties and shirts, diamonds, porcelain, antique furniture, finely bound books.

[コメント]

ダッシュが the things の詳細を示す。カンマが列挙を示す。silk は ties と shirts の両方に掛かる。

(修正訳)⇒絹のネクタイとシャツ

(p181—518) * 名詞

シテ・ファギエール、そこだった！

The Cite Falguire, that was it!

[コメント]

エルの音が抜けている。

(修正訳)⇒シテ・ファルギエール

(p181—518) * 名詞句

酔っ払いたちの酒盛り、安い白葡萄酒、はげしい争い、そしていつもいつも、苦悩にみちた、無愛想な、絵にとりつかれている、あの子の暗い顔。

: the drunken parties, the cheap white wine, the furious quarrels, and always, always the bitter sullen face of the boy brooding over his work.

[コメント]

前後から仲の良い三人のことを言っているのが分かる。「はげしい争い」では、反目しあう者同士になってしまう。

(修正訳)⇒いさかい

(p182—518) 二重の意味

「それから、ぼくは一文ももうからなかった。これも一緒に祝杯をあげようね」

‘And I have made nothing. We can celebrate that also.’

[コメント]

この前にある相手の、I have made a great sum of money with my work.を受けての台詞。make は二つの意味を掛けていると思う。「金を生み出す」「物(作品)をつくる」。両方を含む日本語がないからこれでよしとするか。

(p183—518) * 慣用句

しかし、もう夜だし、それに豚のように金持ちだった。

But it was evening now and he was wealthy as a pig, ...

[コメント]

as a pig は「とても」の比喩表現。そのまま豚のようにでは分からない。

(修正訳)⇒**相当な**

(p196—525) * 日本語

刺青がしごく入念にほってあるので、もりあがった絵のように見える。少年は、はじめに描いた下絵をできるだけ忠実に追って、ベッタリと、タッチのあいだというあいだを、さまざま色で塗りつぶしたのだ。そして脊椎と肩甲骨の隆起をたくみに利用して、作品を効果的に仕上げたその腕前は、じつにあざやかだった。

The tattoo was applied so heavily it looked almost like an impasto. The boy had followed as closely as possible the original brush strokes, filling them in solid, and it was marvellous the way he had made use of the spine and the protrusion of the shoulder blades so that they became part of the composition.

[コメント]

in solid は「ベタ(隙間のないこと)」だろう。「タッチ」は筆遣いの意味だが、「あいだというあいだを」となじまない。

(修正訳)⇒**背の平面を掘って、さまざま色で塗りつぶしたのだ**

(p198—526) * 受動態

そのあと、第二次世界大戦になって、ジョシーは殺され、ナチがやって来て、彼の商売はあがったりになってしまったのだ。

Then had come the second war, and Josie being killed, and the Germans arriving, and that was the finish of his business.

[コメント]

kill が受け身で行為主が示されない場合、「死んだ」とほぼ同義になる。

(修正訳)⇒ジョシーは死に

(p198—526) ** 形容詞

これからさき、いったいどうすりゃいいんだ。ことさら、物を人に乞うというようなことのできない人間にとって、いっそうつらいことだった。が、ほかにどのような方法で、生れるというのか・・・・・・・・

It wasn't very easy for an old man to know what to do, especially when one did not like to beg. Yet how else could he keep alive?

[コメント]

keep alive は「生きてゆく」こと。ここ、送り仮名が足らず読みようがない(「生まれる」?) 「生きれる」?

(修正訳)⇒生きてゆけばよいのか

(p204—528) *** 否定

「六十一だよ」

「しかしまだまだ元気らしいな。見たところは、え、どうです?」

‘Sixty-one.’

‘But you are perhaps not very robust, no?’

[コメント]

ここでの perhaps は語調を整えるためのもので、確率をいってはいない。

not+程度を示す副詞＝部分否定

否定に、否定が重なる不可疑問は、主文の否定の念押し。

(修正訳)⇒だがそう頑強というわけでもないのでしょ

(p204—528) * * * 行為の順番

なおもあとずさりしながら、うしろに立っていた背の高い人が、その肩に手をかけてさせていた両の手のなかに、老人は入ってしまった。

He edged straight into the arms of a tall man who put out his hands and caught him gently by the shoulders.

[コメント]

訳文は全く意味不明。動詞がすべて過去形であることから、一連の短い時間での動きが含意される。そして文脈から、行為は文の前から後の順番ととれる。老人が後ずさる⇒背の高い男の腕の中に納まる⇒男は手を広げて、老人の方を掴む

(修正訳)⇒広げた腕の中に入ってしまった。そして肩を優しく包まれた

(p207—530) * 指示語

「いやいや、とんでもない、わかってもらえませんか！あんたは誤解している。この外科医はね、あんたの背中から皮をはがしたあとで、新しいやつをはりつけるのです、なに簡単にできますとも」

‘No, no, please! You misunderstand. This surgeon will put a new piece of skin in the place of the old one. It is simple.’

[コメント]

外科医はここにいるわけではない。thisは「いま話題となっている」の意。

(修正訳)⇒その外科医はね

(p209—531) * 焦点

それから数週間たらずのうちだろう、スーチンによって描かれた、ひどくかわった手法の、女の顔の絵が、厚くワニスをかけられて、美しい額縁にかざられ、南米のブエノス・アイレスで売り出されたのは、また同様に、カンヌにはブリストルというホテルがないという事実も、なにかちょっと気にかかるので、つい、あの老人のことを考えて、彼の健康を祈りたくなるだ。・・・

It wasn't more than a few weeks later that a picture by Soutine, of a woman's head, painted in an unusual manner, nicely framed and heavily varnished, turned up for sale in Buenos Aires. That — and the fact that there is no hotel in Cannes called Bristol — causes one to wonder a little, and to pray for the old man's health, and to hope fervently that wherever he may be at this moment, there is a plump attractive girl to manicure the nails of his fingers, and a maid to bring him his breakfast in bed in the mornings.

[コメント]

「また同様」では前後の文が繋がらない。

(修正訳)⇒カンヌにはブリストルというホテルがないという新たな事実も気に掛かった。それで、あの老人のことを考えて、彼が健やかであることを祈りたくなるのだ。